

小原一穂・小原浄二

バリトンリサイタル

'96.4.28 (日)

P.M.3:00 開演

都南文化会館キャラホール

主催／盛岡バッハ・カンタータ・フェライン

後援／岩手県教育委員会

盛岡市教育委員会

岩手日報社

朝日新聞盛岡支局

テレビ岩手

NHK盛岡市放送局

IBC岩手放送

FM岩手

岩手日独協会

グルッペベッヒライン

ITB

ごあいさつ

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン代表 下田 潤



本日は、ご多忙のところ演奏会にお越しくださいませ、誠にありがとうございます。
ます。

この演奏会は、多くの方々のご理解とご後援により開催の運びとなりました。ここに厚く御礼を申し上げます。

小原一穂さん、浄二さん兄弟は、どちらも盛岡バッハ・カンタータ・フェラインの中心メンバーとして、高校生時代から活躍をされました。

その豊かな天分と旺盛な研究心、リーダーシップにより、我々会員の柱となってこの合唱団に音楽のすばらしさを伝えてくれています。

音楽家としても、共に大きく成長された現在のご兄弟は我々の誇りでもあります。昨年ドイツ各地の演奏会では共にソリストとしてその実力を遺憾なく発揮されました。

本日もまた、お二人それぞれの持ち味が会場に響きわたることを期待しております。

どうぞごゆっくりお楽しみください。

“岩手の誇り～二人の名バリトン歌手”

佐々木 正利



もう10年近くも前になるでしょうか。仙台で行われた国際バッハ・アカデミーのこと。バッハ指揮者として誰もが認める世界の第1人者、H・リリングが音楽監督を務めるこのアカデミーの修了演奏会で、二人のバリトンが注目を浴びました。出し物はヨハネ受難曲。そこでのイエス役に、並み居るオーディション参加者の中から、世界的名歌手P・フッテンロッハーは二人の優れた歌手を選考したのです。二人でそれぞれ第Ⅰ部、第Ⅱ部を受け持ち、その見事な歌唱ぶりは正に圧巻もの、

客席の私も心から感動したものでした。

何を隠そう、このお二人こそが今宵の主演、小原兄弟だったのです。今はお二人の奥様となられた育世さん、伸枝さん共々、盛岡から参加者はことごとくソロの金的を射止められ、かのリリング氏も「一体、盛岡という街はどういうところなんだ」と驚愕の眼差しで語っておられたことを思い出します。

お二人とも、その学びの緒は岩手大学に始まります。兄上一穂君はその後、東京学芸大学大学院で更に研鑽を深められ、現在は、岩手大学教育学部附属小学校の教諭として、学校教育はもとより、教員の研修にもその手腕を発揮なされ、岩手の音楽教育界になくってはならぬ存在となっております。彼の素晴らしいさは、忙しい校務の傍ら、音楽を教える教師が自ら音楽を実践することの大切さを、身をもって証していることであらうでしょう。教えることに長けた人間が、その本体である“音楽”の真理を飽くこと

なく追求している様は、学生時代に習得した（と思っている？）“音楽”でもう十分とばかりに、教育技術の獲得（勿論、これも大変重要なことですが）だけに躍起になっている教員が多い中、正に正鵠を射たものと回りから慕われ、また目標とされております。その優れた歌唱力のもとより、機知に富んだ的確な指導力、そして音楽性みなぎる指揮ぶり、彼の豊かな才能は、ここ岩手に留まらず、東京、果ては遠きドイツの地においても花を咲かせました。本当に頼もしい限りです。

一方、弟君浄二君は、岩手大学卒業後直ちに東京芸大音楽科に進学なされ、何と首席でご卒業、同大学院も大変優秀なる成績で修了され、その後ドイツへの留学を経られて、現在は、高知大学教育学部音楽科の専任講師として、後進の指導にあたっておられます。勿論、〈教育〉と共に大学教官の使命であるもう一本の柱〈研究〉にも類い稀な才能と情熱を発揮され、オラトリオ歌手としての活躍ぶりは、日本全国のみならず、ウィーン、ミュンヘン、ハンブルクと世界的に名を馳せておられます。また、今や世界の鈴木こと、鈴木雅明氏率いるバッハ・コレギウム・ジャパンの音楽リーダーとして、数々の名演を生み出して参りました。深みのある正統的な彼の歌唱には実に多くのファンが共感を覚え、その演奏の虜となった聴衆に、正に期待を裏切らない真の感動を与えてきたのです。喜ばしいのは、そうした彼がその本拠を地方に定めたところでもあります。文化の発信地が必ずしも政治、経済の中心地に重なる必要はない。いやむしろ、生活にゆとりのある自然豊かな地方都市でこそ、本物の“音楽”を育むにふさわしいことを、彼はその音楽生活過程のなかで感じ取ってきたのではないのでしょうか。本日は、高知大学の同僚宮田先生が伴奏の労を執って下さいますが、若い、力ある音楽家たちが手を携えて音楽教育実践に取り組まれることの素晴らしさは、筆舌に尽くし難いものがあります。高知の未来は明るい。そう断言して憚りません。

お二人とも、盛岡バッハ・カンタータ・フェラインで共に音楽を研鑽してきた仲間です。一穂君は、現在もコンサート・マスターとして私を支えて下さり、また団員からも全幅の信頼を寄せられています。浄二君も岩手大学の1年次からバスのパート・リーダーを4年間務めて下さり、その後も度あるごとに活動に参加され、団の音楽的向上に寄与なさって下さいました。本日、一穂君の伴奏をなさる剣持さんもフェラインのオルガニスト、本当に皆で力を合わせて“音楽”をしてきたんだなあ、感慨無量な想いでいっぱいです。フェラインから巣立ったお二人の記念のリサイタル。今、団員の心は、主催させていただいたことに、感謝と喜びで満たされていることでしょう。

このように、実力も実績もあるお二人ですが、驚くべきことはそれを決して誇示なさらないということです。普通これだけの力があれば、それこそ自己顕示欲の固まりと化しても回りは不思議に思わないはずなのですが、何故かお二人にはそれがありません。ところが、真理探求に寄せる並み並みならぬ意欲は、その心の内に見て取れるのです。この姿勢は何処から生まれてきたのでしょうか。私はお二人との長いお付き合い（プライベートも含めて）から一つの結論を見出しました。それはお二人のお父上、省佑先生の教育によるものであると。校長として学校教育に長く関わってこられたお父上ご自身の教育理念を、家庭教育に反映させられた成果が、いたずらに自己規制しない謙虚な意欲、慢心せず常に次なる目標を目指す向上心といった、お二人の姿勢に結び付いてきたのだと思います。いずれにしても、お二人の真摯で心のこもった歌唱は、小原家の豊かな愛情から生み出されたものであることを、改めて心に深く銘記したいと思うのです。

小原兄弟の歌唱は何処へ出しても恥ずかしくありません。それどころか、岩手が生んだこの二人の名バリトンが、如何に多くの人々の心を潤してきたことでしょう。私たちは、この二人を誇りに思います。さあ、期待に胸を躍らせながら、静かに開演のベルを待つことに致しましょう。

ごあいさつ

ヘルムート・クレチュマール
Helmut Kretschmar



音楽家・小原一穂氏と小原浄二氏を、私は長年にわたり知悉致しております。
日本及びドイツにおける彼らのドイツ歌曲・オラトリオ研究に対する指導助言の機会を得たこと、そして彼らが目ざましい成長を遂げたことは、私に大きな喜びをもたらしました。

私は、この二人の歌手を恵まれた声の素質のみならず、高い知性と芸術的な繊細さをもった音楽家として高く評価しております。また、彼らの徹底した研究とドイツ語の正確な知識は、高度な専門性をもってとりわけドイツ歌曲に発揮できる水準にあります。

小原一穂氏と小原浄二氏が、日本の同世代の中で傑出した声楽の才能をもっていることを私は確信しております。日本におけるコンサートのご盛会に対し、最上のご挨拶を心より彼らにお届けいたします。

デトモルトにて 1996年2月10日
教授 ヘルムート・クレチュマール
(訳 中地雅之)

〈原文〉

Die Sänger Kazuho Obara und Joji Obara sind mir seit mehreren Jahren bekannt.
Ich hatte die Freude, sie sowohl in Japan als auch in Deutschland bei ihren Studien mit Deutschen Liedern und Oratorien zu beraten und ihre bedeutende Entwicklung zu verfolgen.

Beide Sänger halte ich nicht nur für stimmlich hochbegabt, sondern auch für Musiker von besonderer Intelligenz und künstlerischer Sensibilität.

Ihre eingehenden Studien und ihre genauere Kenntnis der Deutschen Sprache setzen sie zudem in die Lage, sich mit großer Kompetenz speziell dem Deutschen Lied zu widmen.
Ich halte Kazuho Obara und Joji Obara für absolut herausragende Gesangsbegabungen ihrer Generation in Japan.

Für erfolgreiche Konzerte in Japan sende ich ihnen von Herzen meine besten Wünsche.

Detmold, den 10. 2. 1996

Prof. Helmut Kretschmar

プログラム

小原 一穂

ピアノ 劔持 清之

F. Schubert 〈シューベルト〉

“Winterreise” 〈歌曲集「冬の旅」 D911〉 より

1. Gute Nacht 〈おやすみ〉
2. Wetterfahne 〈風見の旗〉
3. Gefrorene Tränen 〈凍ゆる涙〉
4. Erstarrung 〈かじかみ〉
5. Der Lindenbaum 〈菩提樹〉
6. Wasserflut 〈あふれる涙〉
7. Auf dem Flusse 〈川の上〉
8. Rückblick 〈かえりみて〉

小原 浄二

ピアノ 宮田 信司

J. Brahms 〈ブラームス〉

“Vier ernste Gesänge für eine Bassstimme” 〈「バスのための4つの厳粛な歌」 Op 121〉

1. Denn es gehet dem Menschen 〈人に起こることは〉
2. Ich wandte mich und sahe 〈私は顔を向けて見た〉
3. O Tod, o Tod, wie bitter bist du 〈おお死よ、何と苦痛なことよ〉
4. Wenn ich mit Menschen-und mit 〈たとい私が人々の言葉や〉

休 憩

J. S. Bach 〈バッハ〉

Kantate, Nr 56 “Ich will den Kreuzstab gerne tragen”

〈カンタータ第56番「喜びて十字架を担わん」〉 よりアリア

小原 一穂

ピアノ 劔持 清之

Ich will den Kreuzstab gerne tragen 〈喜びて十字架を担わん〉

小原 浄二

ピアノ 宮田 信司

Endlich wird mein Joch” 〈ついにわがくびきは去らん〉

Matthäus-Passion” 〈「マタイ受難曲」 BWV 244〉 よりアリア

小原 一穂

ピアノ 劔持 清之

Gebt mir meinen Jesum wieder 〈私のイエスを返せ〉

小原 浄二

ピアノ 宮田 信司

Mache dich, mein Herze, rein 〈わが心よ、自らを潔めよ〉

プロフィール



小原 一穂

(おばら かずほ)

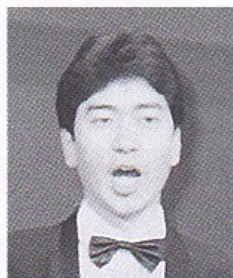
1959年生。岩手県立盛岡第一高等学校、岩手大学教育学部音楽科卒業。東京学芸大学大学院修士課程修了。森肇子、今関由紀子、移川澄也、中村義春、佐々木正利、P. フッテンロッハーの各氏に師事。1985年、1990～91年、1995年渡独。1986年、1989、1995年H. クレッチマル氏公開レッスン受講。1987、88年H. リリングが芸術監督を務めるバッハアカデミーに参加、修了演奏会に出演。ソリストとして、第九、メサイヤ、クリスマスオラトリオを始め、ミサ曲、レクイエム等を大学及び一般合唱団と共演。仙台バッハアカデミー「カンタータの夕べ」、岩手県民オペラ、盛岡楽友協会音楽祭出演。東京バロックゾリステン、若竹コーラス指揮者を歴任。現在、グルッペ・ベッヒライン会長。盛岡バッハカンタータフェライン・コンサートマスター。盛岡楽友協会会員。岩手大学教育学部附属小学校勤務。



剣持 清之

(けんもち きよゆき)

国立音楽大学器楽科卒業。「コンコーネ50番」ピアノ伴奏テープ録音。ビデオ・ディスク「チェンバロのすべて」録音。国立音楽大学教授佐藤峰子氏の演奏会および同氏主催声楽研究会専属ピアニストを務める一方、バロックアンサンブル「Musika Anrede」チェンバロ奏者として活動。1991年仙台において海老澤敏氏によるモーツァルト没後200年記念講演でピアノ協奏曲を演奏し好評を得る。93年佐々木正利リサイタルにおいてオルガン、ピアノを務める。94年仙台NTT主催チェンバロ・リサイタルを行う。95年盛岡バッハ・カンタータ・フェラインドイツ演奏旅行に帯同し、ニュルンベルク交響楽団とのハイドン「天地創造」のチェンバロ、カメラータ・ヴォーカール・ギンツブルクとの合同演奏会でのオルガンを務める。9月モーツァルトの室内楽によるリサイタル開催。11月岩城宏之指揮、オーケストラ・アンサンブル金沢、盛岡バッハ・カンタータ・フェライン「天地創造」演奏会のチェンバロを務める。ピアノを中村ウメ、佐々木靖子、小島満里、故ロマン・オルトナー、チェンバロ、通奏低音を西川清子、オルガンを小林みゆきの各氏に師事。現在、盛岡大学短期大学部助教授。盛岡楽友協会、グルッペ・ベッヒライン各会員。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン・オルガニスト。



小原 浄二

(おばら じょうじ)

1964年生。岩手県立盛岡第三高等学校、岩手大学教育学部音楽科卒業。東京芸術大学音楽学部声楽科首席卒業。同時に松田賞受賞。東京芸術大学大学院修士課程独唱科修了。声楽を森肇子、佐々木正利、伊藤亘行、多田羅迪夫の各氏に、ピアノを佐々木幸子、柏純子、高橋功宜の各氏に師事。ドイツリート、オラトリオを中心に研鑽を積み、東京芸大時代には小林道夫氏のもとバッハカンタータクラブに所属し、数多くのソロを歌う。その後、芸大「メサイヤ」「ヨハネ受難曲」公演をはじめ全国各地の演奏会にソリストとして出演。1991年にはウィーン楽友協会ホールにおいて、ブラームス「ドイツレクイエム」、また、1993年にはシュトゥットガルト、ケルン、ドレスデン、ワイマール等において、「ヘルダーリンの詩による歌曲」を歌い好評を博す。1992～1994年にはバッハコレギウムジャパンに所属しコーラスマスターを務める一方ソロとしても活躍。1994～1995年ドイツ〔ハンブルク・デットモルト〕留学。ヘルムート・クレッチマル氏に師事。留学中も積極的に音楽活動を行い、特にレリゲン市におけるヴォルフガング・ツィルヒャー指揮・ロッシニ「ミサ・ソレネッレ」や、ミュンヘン・ヘラクレスホールにおけるニュルンベルク交響楽団定期公演、ヨゼフ・ツィルヒ指揮、ハイドン「天地創造」のバスソロなどは、現地新聞紙上等において高い評価を受ける。高知大学教育学部音楽科講師。グルッペ・ベッヒライン会員。



宮田 信司

(みやた しんじ)

東京芸術大学音楽学部器楽科卒業後、渡独。リユーベック国立音楽大学をコンツェルトエグザーメン（演奏家資格試験）に合格し、卒業。ハンブルク交響楽団とショパンピアノ協奏曲第1番共演の他、各地で演奏会活動の後、帰国。名古屋、東京、高知などソロリサイタル、デュオリサイタルに出演。さらに伴奏の分野でも活躍中。1993年文部省在外研究員として、ウィーン国立音楽大学にて研鑽を積み。伊達純、坪田昭三、ローラント・ケラーの各氏に師事。現在、高知大学教育学部助教授。

本日の演奏曲目について

来年は「歌曲王」フランツ・シューベルト（1797～1828）の生誕100年を迎えますが、本日演奏される彼の有名な連作歌曲集《冬の旅》は、《美しき水車小屋の娘》（1823）と同様 W. ミュラー（1794～1827）の連作詩に付曲されたものです。作曲者の死の前年である1827年2月（第1部12曲）と5月（第2部12曲）に作曲されたこの曲集は《水車小屋》とは異なって物語的脈絡が曖昧であり、失恋し夢と現^{うつ}の世界を往き来しつつ旅をする孤独なさすらい人の心理的独白で満たされています。心理的描写の深化は、まさに19世紀の産業社会・機械文明の進展に伴った大衆化がもたらした個人の孤立化・匿名化を背景としており、《冬の旅》全24曲中ほぼ2/3が短調で書かれ、長調ももはや諦念を伴って響くのです。本日演奏される内容は《冬の旅》第1部最初の8曲です。第1曲〈おやすみ〉で、この曲集を統合する「歩みのリズム動機」の伴奏にのり、彼女の裏切によって恋に破れた失意の主人公が踏み出したのは、より抽象化されたレヴェルでの〈冬の旅〉即ち〈孤独な人生〉であり、苦しげに自らを Fremd（よそ者）とし「おやすみ」と別れを告げたのは、彼女の存在を含んだ（産業社会の中心である）都会そのもの。第2曲〈風見〉（因みに Wetterfahne には〈無節操な人〉という含意もある）は、伴奏で描写される風に翻る彼女の家の風見が象徴する彼女の心変わりと主人公の未練を映し出し、第3曲〈凍ゆる涙〉では伴奏の〈歩みのリズム動機〉の変形が落涙のイメージと重ね合わされ、第4曲〈かじかみ〉では、不安感を煽るかのような3連符の伴奏にのって、主人公はかつて彼女と歩いた緑野を回顧しつつ、今は雪に蔽われた荒野へと彷徨い出ます。藝術歌曲が民謡になった例として名高い第5曲〈菩提樹〉でも、伴奏で描写される葉のそよぎをもたらす風はあくまで冷たく（短調部）、長調はもはや一瞬の儚い夢幻境でしかない。第6曲〈あふれる涙〉でも、主人公の乱れた足どりや彼が荒野で流した涙が伴奏で象徴的に表現され、涙は Wasserflut（雪解けの水流）となって小川に運ばれ彼女の住む街へと向かうことが望まれるが、川は凍りついており、第7曲〈川の上で〉では、氷面下で滾る想いを胸に主人公は彼女の名と思い出の日付を氷結した川面に刻み込み、スタカート^{staccato}の伴奏は〈歩みのリズム動機〉と氷面を削る音を効果的に描写しています。第8曲〈顧み〉に至り、彼女の家（あるいは古き良き時代）へと振り返りたい気持ちと街（現実）からの逃避というアンビヴァレントな感情が、激しく動揺し足早になる歩みを示す伴奏にのって語られていきます。

シューベルトからシューマン以降の藝術歌曲における「心理的なもの」を重視する傾向に異を唱え、民謡を「歌曲の理想」とし、一般に「保守派」と看做されがちなヨハネス・ブラームス（1833～1897）について、今世紀初頭、無調から12音技法へと進み、調性音楽に引導を渡した、当時最も急進派であった作曲家 A. シェーンベルク（1874～1951）は「革新主義者ブラームス」と題した論文において、「革新的 progressive」であると評価し、ブラームス最後の歌曲である《バスのための4つの厳粛な歌》op.121 第3曲を例にとり、崇高な曲調の背後に隠された、緻密な動機労作による極限までに凝縮された音楽構造を明らかにしています。まさにそこにシェーンベルクは、自らが理想とした J.S. バッハ以来の「手仕事の作曲」の実践者の姿を見出したのでした。この今からちょうど100年前の1896年5月に作曲された歌曲集は、ブラームスが自身の63才の誕生日（5/7）のために自ら聖書から歌詞を選んで付曲されていますが、相次ぐ親友たちの死去、死の床にあった「本当に愛したただ一人の人」クララ・シューマンの逝去（5/20）、そして翌年に迫りつつあった自らの死期への予感がブラームスをして作曲に向かわせたことは言を俟ちません。第1曲・第2曲は、非常に厭世的な内容をもった旧約聖書中のソロモン「伝道の書」第3章・第4章よりとられたテキストにそれぞれ付曲されています。前者では憂鬱と諦念を象

徴するニ短調の調べ（〈黄金虫は金持ちだ〉の伴奏）によって諸行無常が虚無感をもって語られ、後者では、悪業が横行するこの世で生きるよりむしろあの世への憧憬が、メランコリックな死の願望を象徴するト短調でカンタータ風に歌われています。第3曲は旧約聖書外典「ベンシラの知恵」第41章からのテキストへの付曲で、非現実の世界を象徴するホ短調で死の痛まじさが訴えられ、それはホ長調での死への祝福・賛美へと移ってゆきます。新約聖書「コリント人への第1の手紙」第13章からとられたテキスト（所謂「愛の章」）に付曲された第4曲は、「清朗な愛、よき意志、希望、よりよい世界への願望」を象徴する変ロ長調で〈愛 Liebe〉による死の超克が強調され、バロック的独唱カンタータ的とも目されている（オーケストレーションのスケッチも残っている）この作品を締めくくります。生前この曲の演奏を拒んでいたブラームスにとって、この作品は自らの死だけではなく予期していた調性音楽の終わりへの挽歌でもあったのでしょう。

過去の様式や表現手段を学問的にも熱心に研究し自らの創作に役立てたブラームスのみならず革新者シェーンベルクまでもが範としたのは、ヨーハン・ゼバスティアン・バッハ（1685～1750）の緻密に構築された音楽でした。本日演奏される《カンタータ第56番「喜びて十字架を担わん」》（1731/32）は〈独唱カンタータ〉という曲種の典型です。三位一体後第19主日のための福音書（マタイ伝第9章）をふまえたテキストは人生を舟路にたとえており、神を信じ艱難辛苦の荒波を乗り越えてはじめて死による救済という安息の港へと辿りつくことができるという内容。第1曲アリア「喜びて十字架を担わん」はリトルネロを伴ったA-A'-Bの形式で、〈ため息〉の音型（スラーで結ばれた2音が連続する音型）やKreuz（十字架）という語に#を伴った音符をあてるといった音象徴的表現がちりばめられ、現世で苦悩しつつも主への確固たる信仰が峻厳な雰囲気の中で告白されています。第3曲アリア「ついに我がくびきは去らん」は、A(a-a')-B-A(a-a')というダカーポ・アリアの形式をとり、苦しみ（軛）から解放された喜びが軽やかに歌われ、新しい人生への期待に満ち溢れています。

既に生前から「時代遅れ」のレッテルを貼られ一般人からは次第に忘れられていったバッハでしたが、1829年メンデルスゾーン指揮による《マタイ受難曲》復活上演が機縁となって「バッハ復興」の機運が昂まり、まさにブラームスがバッハに開眼したのは、クララ・シューマンからプレゼントされた（1851年より編集され始めた）『(旧) バッハ全集』の第1巻によってだったのです。この《マタイ受難曲》（1728/29）は、マタイ福音書によるキリスト磔刑の物語（ルター訳のドイツ語）をテキストとしたオラトリオ風受難曲です。自由詩楽曲の歌詞はピカンダーという筆名の詩人F. ヘンリーツィによるもので、本日演奏される2つのアリアもこれに拠っています。第42（51）曲アリア「私のイエスを返せ」は、イエスを売ったことを後悔したユダが裏切の報酬である銀貨を返すかわりに主イエスの返還を求める叫び。投げ捨てられた銀貨の跳ねる音を示す伴奏部の上行音階（本来はヴァイオリン独奏部）という音画的表現を伴う明るい曲調が、改心し首吊り自殺したユダの救済を暗示しています。イエスが十字架から下ろされ埋葬される場面に付された第65（75）曲アリア「我が心よ、自らを潔めよ」では、シチリアーノのリズムにのったダカーポ・アリアで、天変地異によってイエスが〈神の子〉であったことが認識された後の清明さに満ちた平和な雰囲気が提示され、イエスを自らの心の内面という墓へおさめることによって救済が祈念され続けるのです。

（きむら なおひろ）

F. シューベルト 「冬の旅」

1. おやすみ

よそ者として やって来た 私は
ふたたび よそ者として 出で立ってゆく
五月は いくつもの 花束によって
私に やさしくしてくれた
娘は 愛を語り
母は 結婚をさえも 語ってくれた
しかし 今 この世はたいそう暗く
道は 雪に とざされてしまった

私は わが旅のために
時期を 選ぶことは できない
この暗黒のなかで みずから
わが道を 示さなければならぬのだ
月影が一つ わが道連れとして
私といっしょに ついてくる
そして 私は 雪に白い牧草地の上に
野獣の足跡を 探し求める

人びとが 私を 追い出そうとするまで
どうして 私は これ以上長く留まって
いなければならない訳がある？
さ迷う 犬どもは
彼らの主人の家の前で 吠えさせるがいい！
愛は さすらいを 愛するのだ
神が そのように なし給うたのだ——
一つのものから 他のものへと さすらうのだ——
やさしい恋人よ お休みなさい！

夢のなかにいるおまえを 邪魔したくないのだ
そんなことをしたら おまえの安息は
失われてしまうだろう
おまえは 私の足音を きいてはいけない
静かに 静かに 扉を閉じよう！
私は そうして 通りすがりに
おまえの扉に お休み と書いてゆこう
それによって 私が
おまえを想っていたと知ってくれるように

2. 風見の旗

風が わが美しい恋人の家の上で
風見の旗と たわむれている
それを見ると 私はもう
妄想したものだ
この旗は あわれな逃亡者〔私〕を あざ笑って
ひゅうひゅう鳴っているのだと

「彼は もっと早く 気がつくべきだった
この家に掲げられた看板に
そうすれば 彼は この家のなかに
忠実な女の姿を求めようとは
決してしなかったことだろう」と

風は 胸の内でも 屋根と同じように
心とたわむれている
ただ 屋根でのように音高くはない
どうして この家の人々が 私の苦しみのことを
訊いてくれたりするだろう
この家の娘は 金持ちの花嫁に なったのだもの

3. 凍ゆる涙

凍えた滴が 流れおちる
私の 両の頬から
いったい 私は 自分が泣いたということに
気が付かなかったのだろうか？

ああ涙よ 私の涙よ
それなのに おまえは
冷たい朝露のように かたく凍って
氷になるほど 冷たいのか？

だがそれでも おまえは 胸の泉から
かくも 灼熱して 奔り出る
まるで すべての冬の氷を
溶かしてしまおうと するかのように

4. かじかみ

私は 雪のなかに 空しく
彼女の足跡をさがし求める
彼女が 私の腕に よりかかって
さすらった 緑の野のあたり

私は その大地に 口づけし
氷と雪を さし貫きたい
あの土地を 見出すまで
私の 熱い涙をもって

花一つ どこに 見つけたらよいのだ？
どこに 緑の草が 見つかるのだ？
花々は 枯れしぼみ
草原は すっかり 色褪せて見える

では 私は ここからは
何一つ追憶を 持ち帰っては
ならないのだろうか？
私の痛みが 沈黙するとき
誰が 彼女について 私に 語って
くれるのだろうか？

私の心は 死んでしまったようだ
私の心の内で 彼女の像は 冷たく
凝固してしまった
いつか又私の心が ふたたび
溶けるときには
彼女の像も 流れ出てくるだろう

5. 菩提樹

市門の前の 泉のほとりに
一本の 菩提樹の木が 立っている
私は その木の 木陰で
いくたびも 甘い夢を 夢見たものだった

私は その木の樹皮に
いくつも 甘い言葉を 刻んだものだった
喜びにつけ 悲しみにつけ いつも
私は その木に 心を 惹かれるものがあった

今日もまた 私は 夜更けて
その木のそばを 通らなければならなかった
通り過ぎるとき 私は
暗闇のなかでも やはり 目を閉じた

すると その枝々が ざわざわと鳴って
まるで 私に こう呼びかけるかのようにだった
「友よ こちらへ来るがよい
ここに おまえの安らぎが
見つかるだろう！」と

冷たい風が 真向から
私の顔めがけて 吹きつけてきた
帽子が 頭から 飛んでいったが
私は 振りむきもしなかった

今 私は その場所から
幾時間もかかる 離れた所にいる
だが それでもたえず
私はざわめきの音を耳にするのだ
「おまえは そこに 安らぎを
見出すだろう」と

6. あふれる涙

たくさんの涙が 私の目から
雪のなかへ 流れおちた
冷たい雪片は 渴して
その熱い悲しみを 吸いこんだ

草々が 芽を出そうとするころには
あたりを 生温かい風が 吹き
そして 氷は こなごなに砕け
やわらかい雪も 溶けて流れるだろう

雪よ おまえは 私の憧れを 知っていよう
言ってくれ いったい おまえの流れは
どこへ行くのだ？
ただ 私の涙にだけ ついて来てくれ
そうすれば すぐに 小川がおまえを迎えて
くれるだろう

小川とともに 陽気な通りを出たり
入ったりしながら
町を さすらい流れてゆくと

おまえは 私の涙が 灼熱するのを
感ずるだろう
その町には 私の恋人の家が あるのだ

7. 川の上

あんなにも愉快そうに さざめいていたおまえ
明るく たぎっていた小川よ
何と おまえは 静かになってしまったの
だろう
別れの挨拶もくれないで

かたい こちこちの樹皮のような氷で
おまえは 身を蔽ってしまったのだ
おまえは 砂地のなかにも 長々と伸びて
冷たい そして身動きもせずに
横たわっている

おまえの氷の蔽いのなかに 私は
先の尖った石で
私の恋人の名前を 彫りこんだ
それからあの時と あの日付とを 彫りこんだ

それは はじめての挨拶の日付だ
私が 出かけていった あの日付だ
その名前と 数字のまわりに 私は
一つの壊れた環を 描いた

わが心よ この小川のなかに
おまえは 今 自分の姿を
認めないだろうか？
小川が 今 蔽い（氷）の下で こんなにも
はちきれそうに 膨れ上がっているのを
認めないだろうか？

8. かえりみて

たとえ 氷と雪を 踏んでいても
私の足裏は 燃えるようだ
あの町の塔が もう見えなくなるまで
私は 二度と 息をつこうとは思わない

私は 石という石に つまづきながらも
急ぎに急いで 町から 立去っていった
からすたちは どの家からも
私の帽子の上に 雪片やあられを 投げつけた

何と おまえは 以前とは違ったふうに
私を迎え入れるのだ
不実な町よ！
あときは おまえの白く輝く窓辺に
雲雀とうぐいすが 競い合って 歌って
いたのだった

茂った菩提樹の木は 花咲き
澄んだ川の流れは 明るく さざめいていた
それに ああ あの娘の二つの瞳も
燃えていたのに！

だが 友よ もうおまえは 破滅なのだ！

あの日の想いが 心のなかに
よみがえるならば

もう一度 私は ふりかえって見たい
一度だけ また過ぎし日へと よろめき帰って
彼女の家の前に じっと 佇んでみたいものを

J. ブラームス 「バスのための四つの厳粛な歌」

1

なぜなら、人に起こることは獣にも起こるのだ。
獣が死ぬように、人も死ぬ。呼吸もまったく一つで
ある。また、人間には獣よりすぐれた点はない。それ
というの、すべてがむなしだからなのだ。

行きつくところはすべて同じだ。すべてが塵から
作られて、また塵にもどるのだ。

人間の霊は天上に昇り、獣の生命は地下に沈むな
どということが、一体誰に分かるのか。

それで私は悟ったのだ。自分の仕事を楽しむこと、
それが一番よいことだ、と。それが人間の分^{ぶん}なのだ。
一体誰に、人をそこまで連れてゆき、その先何が起
こるかを人に見せることが出来るのか。

(『伝道の書』第3章)

2

私は顔を向け、陽の下で不正に苦しむすべての人
を見た。そして見よ、不正に苦しむ人たちは涙を流
し、しかも慰めてくれる者さえいなかった。彼らに
不正を行う者があまりにも強大で、慰めを与えるこ
とが誰にも出来なかったのだ。

そこで私は、なお生を送るべき生者よりも、すで
に死した死者を讃えた。

しかし、あらゆる生者と死者よりも更にしあわせ
なのは、いまだ生まれてこない者、陽の下に生ずる
悪をいまだに知らぬ者たちである。

(『伝道の書』第4章)

3

おお死よ、何というおまえのつらさ、よい毎日と
充分な余裕をもってうれいなく生を送る人間が、お
まえに思いをいたす時、

また、すべてが順調で、満足に食べることの出来
る人間が、おまえに思いをいたす時、(おお死よ、何
というおまえのつらさ。)

おお死よ、何というおまえのころよさ、飢えた
者には、

年老いて弱く、苦勞ばかりで、よりよい希望も期
待もはや残されていない人間には、(おお死よ、何
というおまえのころよさ。)

(『ペン・シラの知恵』第41章)

4

たとえ私が人間の言葉、天使の言葉で語ったとて、
愛がなければ、やかましい鐘、さわがしい鈴とかわ
りはない。

またたとえ私に予言の能力があり、あらゆる奥義

と知識をきわめ、山をも動かす固い信仰があったと
しても、愛がなければ、無にひとしい。

またたとえ私があらゆる財産を貧しき者に分け与
え、肉体を犠牲にささげ焼かれても、愛がなければ、
それは何の役にも立たぬのだ。

私たちがいま見ているのは、鏡にうつったおぼろ
な言葉、しかし時が至れば面と向かって見るようにな
る。いま私にはその言葉はとぎれとぎれにしか分
からないが、時が至ればその意味も認識できること
であろう。丁度私自身が認識されているように。

ところで永遠に残るのは、信仰と希望と愛のこの
三つ、そして愛こそが、その中のもっとも大いなる
ものののだ。

(『コリント人への第一の手紙』第13章)

J. S. バッハ 「カンタータ第56番」より

〈喜びて十字架を担わん〉

私は喜びて十字架を担わん。
彼は神の尊い御手より来たり。
私を患難に合わせたのち、
約束の地なる神のみもとに導くなり。
そこで私は苦しみを葬り去り、
また救い主は、私の目の涙をみずから
ぬぐいたまわん。

〈ついにわがくびきは去らん〉

ついに、ついにわがくびきは
再び私より離れ去らん。
そのとき私は主によりて力を得、
鶯のごとくならん。
かくして私は、地を蹴って飛び翔り
ひた走るとも疲れることなし。
おお、今日にも時の来たらんことを。

J. S. バッハ 「マタイ受難曲」より

〈私のイエスを返せ〉

私のイエスを返せ
見よ、人殺しの代価の金を
迷える息子が、汝らの
足下に投げ返したのだから。

〈わが心よ、自らを潔めよ〉

わが心よ、自らを潔めよ、
私はわが胸のうちに、イエスを葬ろう。
主は、今より私のうちにいつまでも、いつまでも
安らかな眠りにつきたもう。
世よ、わが心を去り、イエスを迎えよ。